慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本語教育における授受表現：台湾の日本語教科書を中心に
Sub Title	
Author	黄, 啓眞(Ko, Keishin)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2012
Jtitle	日本語と日本語教育 No.40 (2012. 3) ,p.155- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20120300-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』40: 155 (2012.3)

〔日本語教育学講座修了論文〕

日本語教育における授受表現
――台湾の日本語教科書を中心に――

黄　　啓　真

日本語教育学を専攻する一人の留学生として、常に関心を持っているのは、日本語を勉強する外国人留学生にとって、どこが難しいかということである。本論は日本語を習得するときに、特に挫折を感じさせる文法項目、授受表現をピックアップした。

本論の構成としては、第一章では、日本語学における授受動詞の先行研究を分析し、授受表現の全体像とその言語的特性を整理することによって、教授法を提案する際の土台を作る。第二章では、台湾で広く使われている初級、中級の日本語教科書の授受表現の提示の仕方において、その特徴と問題点を指摘する。第三章では、第一章と第二章の内容を踏まえて、台湾で授受表現を教授するための新たな教案を作成し、指導法を提案する。

第一章では日本語の授受動詞を授受本動詞と授受補助動詞に分け、説明していく。本動詞の場合、上野田鶴子を中心に、奥津敬一郎、菊地康人の研究成果を加えて、授受本動詞の言語的特徴について整理する。補助動詞の場合、授受補助動詞文を教授する際、学習者に全体像を見せるために必要とされる内容を、井島正博と紙谷栄治の研究から抜粋し、まとめた。

第二章では、まずは台湾における日本語教育現況について論じ、そして教科書の特徴と授受表現の提示法において、六冊の日本語初級教科書と二冊の中級教科書を分析した。その結果、台湾で広く使われている日本語初級教科書の問題点は、文法のルールそのものについての説明に欠けていること、あるいは文法のルールは確実に提示しているが、語用論レベルの指導が不足していることが分かった。中級教科書の場合では、中級教科書は書き言葉の導入に進むため、本文の形式は文章で提示される場合が多い。そのため、話し言葉の授受表現はなかなか中級教科書で提示されない。

中国語を母語とする台湾人学習者にとって、授受補助動詞構文を学習する際の難しさは三つに分けられる。第一に、学習者が複雑な文法のルールを習得すること。第二に、中国語にはない、心理的な貸し借りを言語化する習慣を身に付けること。第三に、全体的に理解していても、学習者が自ら応用する機会が少ないことである。第三章では、二回の授業を行うことを想定し、授受表現を教授する教案を作成した。一回目の授業では、本動詞「くれる・もらう・あげる」「～てくれる」「～てもらう」「～てあげる」を導入する。二回目の授業では、「くださる・いただく・さしあげる」「～てくださる」「～てただく」「～てさしあげる」「～てやる」「～（さ）せてもらえませんか」「～（さ）ていただけませんか」を導入する。

中級以降の指導法について、雑誌や新聞に掲載されているインタビュー記事や漫画を提示したり、または映画やドラマを提示したりすることが考えられるが、一般の教室設備と教室環境を考慮すると、実行するのが難しいと思われる。日本語教師（特に非母語話者の日本語教師）が中級以降の授業で、授受表現を意識しながら話したり例文を作成したりすれば、学習者が自然に模倣するだろう。ただし、以上述べた提案は消極的な指導法であり、より効率的な指導法考案を今後の課題としたい。